

# 「日中恋愛・結婚」のナラティブと もう一つの可能性

— 中国近代文学を読む —

林 麗 婷

日清戦争以降、官費留学・私費留学を問わず、多くの中国人が来日するようになり、トランスナショナルな経験をすることになった。その中には、日本で勉強し、暮らし、近代的自由恋愛を体験した人もいた。魯迅の弟である周作人しゅうさくじんが明治末期の日本に留学し、日本人女性と結婚したことはよく知られている。また、大正期に日本に留学した郭沫若かくまつじやくも日本人女性佐藤をとみと家庭生活を営んだ。そうした現象に伴い、中国近代文学において日本人と中国人の自由恋愛・結婚をめぐる小説（本稿では便宜上「日中恋愛・結婚」と称する）が多く描かれるようになった。中でも、一九二一年に東京で結成された中国文学団体、創造社のメンバーたちは「日中恋愛・結婚」について多くの小説を書いている。本稿はそういった小説を取り上げて、文学における日中結婚の描かれ方を論じる。具体的には、郁達夫いくたつぷ（二八九六～一九四五）、郭沫若（二八九二～一九七八）や張資平ちやうしへい（二八九三～

一九五九）といった中国近代文学の最初期の代表的な作家の小説を比較・検討し、作品間の対照を通して、「日中恋愛・結婚」の語り方を考察する。後述するが、三人はそれぞれ「日中恋愛・結婚」に関する小説を多く創作しており、主人公の設定や家庭関係のあり方ないし語り方において、それぞれ異なる位相を呈している。三人の作品を並べて検討することによって、ナラティブに孕まれるナシヨナリズム、ジェンダー・ポリティクス、戦争の問題を浮き彫りにすることができよう。また、補助線として、凌叔華りやうしゆか（一九〇四～一九九〇）の作品を考察し、日中交流を描く別の可能性を探っていく。

## 一、「僕が望むのは愛だ」——郁達夫「沈淪」

郁達夫の短編小説「沈淪」（一九二二）は中国近代文学史にお

ける代表的な作品の一つに数えられる。主人公の男子留学生「彼」の、弱い国から来た者としてのコンプレックスを抱えながら日本人女性への性的な欲望に苛まれる姿が描かれた。作品論や作家論、比較文学論の視点など、「沈淪」についての研究は枚挙にいとまがないが、本稿では小説に描かれる恋愛のあり方を再考したい。

一九一五年、郁達夫は名古屋の第八高等学校に入学した。短編小説「沈淪」の舞台であるN城とは名古屋のことを指している。小説の冒頭で、ワーズワースの詩を口ずさみながら野原をさまよう留学生の孤独な姿が読者の目に焼き付けられる。「彼」は学校生活に馴染めず、「憂鬱症がますますひどくなり」、「級友たちの目を避けようと逃げまわるのだが、どこに行っても級友たちの目つきが悪意をもって彼の背中を射抜いているかのようだった」<sup>1</sup>と落ち着かない様子だ。しかし最も「彼」を苦しめたのは女性への性欲に苛まれることだった。小説は「彼」と日本人女性とのいくつかの出会いや遭遇の場面からなる。女学生や旅館の主人の娘、野原で恋人と逢引する女性、遊郭の女中など、小説には次々と日本人女性の姿が描かれる。

まず、路上で女学生とすれ違い興奮を覚えるというシーンがある。家に戻ってもなお女学生のことから離れず気が気になくなってしまふ。小説の中には次のような「彼」の心理描写がある。

ふつと二人の女学生の色目を思い出した。あのいきいきした目！

あの目は確かに媚びを含んでいた。しかしよく考えると、彼女たちのあの秋波はただあの三人の日本人に送ったものじゃないか。ああ！ ああ！ 彼女たちはきつと知っていたんだ。僕が支那人だということを。そうじゃなければどうして僕に一瞥もくれなかったのか！ 復讐する、復讐する、僕は彼女らに絶対復讐してやる。<sup>2</sup>

実際には女学生と一言も交わさなかったにもかかわらず、「彼」は空想に耽けるなかで自分と女学生との間に対立する構図を作った。

次に登場したのは下宿先の娘である。「今年ちようど一七歳になる、面長で大きな目をしている。笑うと両頬にえくぼが現れる」といった可愛い少女だ。「彼」は「心の中では彼女と何か話したいと思っているが、彼女に会うと口を利けなくなる」というようにやはり交流できずにいる。ある日「彼」は少女の入浴を覗き見、「雪のような胸！ ふくよかな腿！ 全身の曲線」と少女の体に目をみはる。少女は覗き見される対象であり、「彼」と会話することはなかった。

三つ目のシーンでは「彼」は、野原で逢引をしている男女に偶然出くわした。女性の顔は見えないものの、「女性の甘ったるい声を聞くと、まるで全身に電気が走ったようになった」と

いう。「彼は耳を尖らすようにして、一言も聞き漏らすまいと一生懸命に」女性の喘ぎ声を盗み聞いた。ここでは、もちろん女性とは無交渉のままであった。

四つ目のシーンでは、「彼」は買春しようとしてある建物に入った。若い女中の香りが「彼」を魅惑した。「彼は彼女の口から吐かれた息が暖かく彼の顔を包んだような気がした。彼は無意識にその息を深く吸い込んだ」というように、「彼」は少女の香りに沈酔している。ここで初めて「彼」と日本人女性との会話が始まる。しかし、「お国はどこですか」と女性に聞かれ、興が醒めてしまう。

この質問を聞くと、彼の瘦せた青い顔がまた赤く染まつた。彼は曖昧に答え、口ごもってはつきりしたことを言えなかった。哀れにも彼はまた断頭台に立たされた。

元来日本人が中国人を差別するのは、我々が豚や犬を差別するのと同じようなものだ。日本人は中国人のことを「支那人」という。この「支那人」の三文字は日本では、我々が人を罵るときに使う「せんぞく賤賊」よりずっと耳障りだ。現に「彼」はひとりの花のような少女の前に、「僕は支那人だ」と認めざるを得なくなった。

「中国よ、中国、どうして強くなってくれないのか！」  
彼は体を震わせて、また涙が零れそうになった。<sup>(3)</sup>

少女の何気ない質問に「彼」は過敏な反応をしてしまった。そして自分の出自にひどいコンプレックスを抱えていることが明かされたのである。

このように、「沈淪」において主人公は、視覚、聴覚、嗅覚など五感を駆使して日本の女性を体感しようとしているが、言葉を交わすこと（聞かれること）には抵抗している姿が浮き彫りになった。言い換えれば、「沈淪」は主人公の日本人女性に対する「窃視」、「盗聴」、「妄想」を語るものなのだ。「彼」が好意を持った少女たちの本当の顔や本当の声を、「彼」は知りようがない。小説の最後に、主人公が急に自殺の衝動にかられ、「あゝ祖国よ、僕の死はお前のせいだぞ」と嘆く。ここでは恋愛ができないのは自分が中国人だからだと再び強調しているのである。

もう一つ留意すべきことがある。「沈淪」を含めて日本人女性を（想像の）恋愛の対象とする小説の中で、日本人男性は不在であるか、あるいはマイナスイメージで語られることだ。中村みどりは次のように指摘している。

男性作家は、日本男性を主体とする、日本の国家主義、民族主義が与える中国への圧迫のなかで、自国の主体性、つまり、中国男性の「男性」性を確保し、圧迫する日本の「男性」性を遠ざけるため、日本男性の「男性」性に従ずる日本女性を性的な存在として強調し、物語世界のなかで、日

本の「女性」性を中国の「男性」性に従属するものとして描き直してみせた。<sup>4)</sup>

つまり、男性作家は日本人女性の中国人男性への愛情を想像することで、自国の「男性性」を担保しようとしたのである。そうでなければ、中国人男性のアイデンティティは崩壊の危機にさらされることになる。「沈淪」はまさに日本人女性の愛情が望めないと絶望した中国人男性の物語である。小説の最後の主人公が海岸に臨み、「祖国よ、強くなってくれ」と叫んで自殺を図るシーンこそが「彼」のアイデンティティの危機を劇的に示している。

郁達夫は一九一三年に渡日したが、ちょうどその頃は「新しい女」が注目を浴びていた時期で、郁も大正日本の女性解放の風潮を経験した。郁は後年の自伝的エッセー「雪夜」で、女優である衣川孔雀や森律子の「妖艶な写真」や、『婦人画報』に載せられた淑女名媛のことを特筆し、艶めかしい女性に心を動かされたことを記している。<sup>5)</sup>一方、「沈淪」に描かれる女性はその社会的地位が高いとは言いが、それでも近づきにくい存在として表象されている。作品の中で繰り返される「支那人」としてのコンプレックスが示唆しているように、「彼」にとって、国家・民族的格差こそが「彼」を少女たちから隔てる原因となっている。主人公が日本の少女に向ける愛憎入り交じった気持ちは、日本に対するアンビバレントな気持ちの隠喩として考えら

れる。「彼」は近代化が進んでいる日本に憧れて留学にやってきたものの、日増しに自国を圧迫していく日本に対して反発を抱かざるを得ない。つまり、少女は日本という記号として想像され、語られているのだ。郁が「沈淪」で描き出したのは、日本人女性と恋愛できない男の惨めな姿である。

## 二、ヒステリックな夫／父 ——郭沫若『漂流三部曲』、『行路難』

一九一六年、岡山の第七高校に在学中の郭沫若は佐藤をとみと結婚した。九州帝国大学医学部を卒業した一九二二年には、すでに二人は三人の子供を持つ家庭を営んでいた。そのためか、異国の女性に愛されれないという自己憐憫に満ちている「沈淪」と異なり、郭沫若の作品には日中結婚を遂げた夫婦の貧困や子育てに疲労困憊な様子が綴られている。一九二〇年に発表した短編「鼠災」では、留学生の方平甫が「日本人牧師の娘」と結婚している。小説の冒頭で、「四年前に自由結婚をしたが、この結婚のせいで彼らは幸福にもなったが不幸にもなった。平甫は家族や友人に見捨てられ、妻も家族や友人に見捨てられた」と日中結婚の苦しみを吐露している。ある日、家に帰った平甫は妻に彼が大事にしている唯一の制服が鼠にかじられたことを伝えられる。彼はそのことにむっとしたが、気持ちのはけ口が無く苛立つ様子が作品には描かれている。次の引用を見てみよ

う。

彼は本当に腹立たしかつたが、怒りを抑えていた。彼が最も恨めしく思ったのは女の態度だ——あの落ち着いた態度！ 彼は女の性質をよく知っている——*Simi hysteria*。(略) 彼はいつも女と息子を虐待していた。彼らが泣いたら、彼は *O, my dear! My dear! Pardon me! Forgive me!* と叫ぶのだ。しかし今日は女が泣いていないせいで、彼は不機嫌になった。<sup>(6)</sup>

妻のことをヒステリックな性質だと主張しながらも、落ち着いた妻の前に苛立つ主人公の姿である。「日中恋愛結婚」をテーマにした郭沫若の小説の多くはこのようなヒステリックな夫／父を造形している。例えば、一九二二年に発表した「未央」、『創造季刊』第一巻第三期)では主人公のことを「もはや神経が変質した」と形容している。本節で中心的に取り上げる『漂流三部曲』と『行路難』にもそのような夫／父が登場している。『漂流三部曲』は「岐路」、「煉獄」、「十字架」の三つの短編からなり、一九二四年に『創造週報』に連載された。この時期、郭沫若は大学を卒業したものの、医者になるとい妻の期待に背いて作家の道を志すようになっていた。一九二一年には創造社の発起人として積極的に活動を続けていたが、経済的には不安定な状態が続いていた。幼児を含む三人の子供を連れて一家は福

岡から上海に渡ったが、生計が立てられなかったため、をとみは子供たちを連れて福岡に戻った。以上が作品の背景である。

「岐路」では、主人公の愛牟(あいむ) (郭沫若の小説の主人公の多くは愛牟という名である)の進路をめぐって夫婦の間に齟齬が起り、妻は夫をなぜ医者になろうとしないかと難じる。すると「彼は「医学は何のためになるか。寄生虫を殺すことができても、微生物を殺すことができても、そういったものを繁殖させた社会制度を滅ぼすことができるものか」と激しく現在の社会制度を批判する。結局妻は妥協し、愛牟が上海で安心して創作できるように、子供を連れて日本に戻った。愛牟は心の中で妻に感謝しながら、ダンテが『神曲』で恋人を賛美したことを真似すべく妻をモデルにした小説を書くことと決心した。しかし、創作活動は思ったように進められなかった。一方で、作家になるという夢のために家族を犠牲にしたうしろめたさを払拭できず、「ああ、僕はエゴイストだ、責任感が薄弱だ」と自分を責める。続く「煉獄」では、家族と離れたものの創作活動に専念できない愛牟が、毎日孤独と戦い、まさしく煉獄のような日々耐えていることが綴られている。最後の「十字架」では、愛牟は作家を諦めても家族と一緒にいたいと回心し、家族の後を追いつ本に戻る。作中では「本当に途方に暮れたときは、三人の息子を殺し、俺たちは博多湾に飛び込もう！」と破滅的な考えが吐露されている。さらに、「十字架」というタイトルが示しているように、愛牟を苦しめたのは作家活動の頓挫や貧困だけでは

なかった。実はかつて両親に命じられるままに旧式の結婚をしたことも彼の人生に暗い影を落としていたのである。日本人の妻との結婚は自分の意志でしたことこそあったが、その結果として中国の家族と絶縁することになり、二度と母に会えなくなったのも愛牟にとつては癒しがたい傷であり、一生重くのしかかる十字架になったのである。

一九二五年に発表された『行路難』は『漂流三部曲』の続編として読むことができる。愛牟一家は福岡に戻ったが、経済状況は一向に改善されず、家賃を払えないために頻繁に引越しを強いられる。やつとのもので翻訳の原稿料で気に入った家に引越したばかりなのに、やはり中国で仕事を探すことになる。しかし中国では軍閥による内戦の混乱で、日中通行の船が止まっていた。家賃を節約するために帰国の船が再開するまでは辺鄙の温泉に行く夫婦で決めた。そのために愛牟は大家と家賃の払い戻しを交渉しなければならなかった。日本人の大家の前で体面を繕おうと唯一の洋服を着て行ったが、お辞儀の時にかぶっている帽子に大きな穴があいていたことがばれて赤恥をかいてしまい、蚊帳の店をやっている大家に「しよやうがないね。無理やり引き留めることもできませんね。引き留めようがないですね。我々が蚊を引き留められないように」と言われる。自分のことを蚊と同じように扱われた愛牟は憤激し、破れた帽子を踏みにじった。「彼は体が固まり、神経病を患っている患者のように、ちつとも動かなかつた」<sup>(9)</sup>のである。そして、機嫌

を悪くした愛牟は怒りを子供たちにぶちまける。

パン！ パン！ お前らがしょつちゆうパンなんかを食うからだ！ お前らのせいで俺は上海で死ぬほど虐げられて、またこの日本で虐げられている！ お前らさえいなければ、俺は何とでもなったじゃないか。俺は餓死しようが凍死しようが日本に来るはずがなかった。ああ、お前らは俺の手かせ足かせだ！ 手かせ足かせ！ お前らは俺を完全に縛っている！<sup>(10)</sup>

家族は自分の重荷だとヒステリックに叫ぶ愛牟の姿である。『行路難』では、特に愛牟は貧困とエスニシティに由来するコンプレックスを抱えているように描かれている。部屋探しは不愉快な経験ばかりで、相手に差別されたと感じると「日本人よ！ 日本人よ！ 恩知らずの日本人よ」と心の中で罵倒する。電車で出会った裕福な日本人夫婦に対して憎しみを覚えずにはいられない。また、妻が温泉地で部屋を借りて自炊を始めると、そのせいで創作に集中できないと苛立ちを覚える。「おっぱいを銜えても泣いているね。わたしを苦しめないで、私を苦しめないで」と夜泣きをしている赤ん坊をなだめる妻に、「誰がお前を苦しめているというのだ。そんなことを言つて俺を煩わせるな」と怒鳴る場面で小説は終わりを迎える。

以上見てきたように、郭沫若は「日中結婚」小説では多くの

苛立つ夫／父を描き出している。中国の古い家族制度に反抗し日本人女性と自由恋愛を経て結婚したが、居場所が定められず主人公は日中西国の狭間に生きてヒステリーに陥っている。中国の社会制度への不満や日本で経験した貧困や差別、創作に対する焦燥など、さまざまな感情が入り混じり、主人公を苦しめているのである。その結果、愛牟は日本人妻を賛美するという小説は最後まで書けなかったのである。

### 三、帝国の少女の声を聞く——張資平『天孫之女』

同じく創造社の創始者のひとりである張資平も「日中恋愛・結婚」を好んで描いたが、登場人物の背景をより複雑にしているようだ。例えば一九二二年に発表した短編小説「她恨望著祖國的天野」（彼女は彼方の祖國をわびしく眺める）においては、中国人の父と日本人の母の間に生まれた少女秋児が登場し、日本の男性と中国の男性、両方にもあそばれた者として彼女は描かれている。郁達夫や郭沫若が（中国人）男性主人公に視点を据えたのに対して、張資平はより日本人女性のあり方に力を入れているといえよう。本節ではこれまであまり注目されてこなかった長編小説『天孫之女』を取り上げて、張資平の日中結婚の描き方を検証する。

『天孫之女』は日本の軍人の家庭に生まれた少女鈴木花子の淪落を語るものである。物語の設定は、上海にいる売れない

青年作家「僕」と友人Eが偶然に一人の日本人の妓女 Honey Jam に出会い、彼女から身の上の話を聞くといいものである。最初に彼女の国籍を聞いたところ、「日本人だって、高麗人だって、支那人だって、西洋人だって、みんな同じ人間ではありませんか。旦那さまがわたしをその国の人だとお考えになりましたら、わたしはその国の人でよろしいのです」と真面目に答えたという。ここでヒロインのネーションに対する普通ではない態度が強調される。「僕」は「彼女の境遇に同情せずにいられない。一方彼女の一般の日本人に対する批判は実に僕を驚かした」と述べ、ヒロインの話を記録することにした。そして第二章以降は Honey Jam こと花子に視点を据えて花子の前半生を遡って語ることになる。ジェンダー・ポリテイクスは『天孫之女』に郁達夫や郭沫若の作品と大きな違いをもたらしている。少し長くなるが、以下に概要を述べながら小説の特色を検討する。

花子は子供時代には家族とともに奉天（瀋陽）で暮らしていた。陸軍××の連隊長である父鈴木牛三郎は中国人に対し残酷非道で、子供の前に中国人の馬車夫を軍刀で斬り殺したこともあった。花子はこのような家庭で育ち、帝国日本を誇り、軍人を崇拜し、中国人を差別していた。「彼女は、中国民族は努力せず向上しようとしなからこのような苦痛を被るのだ、同情なんてもつてのほかだと断定した」という。

鈴木牛三郎が少将に昇進し、一家は大阪に引っ越ししたが、まもなく牛三郎は政治闘争に敗れ入獄し、自殺した。花子と家

族の生活は一転し、運命の歯車が狂う。花子は子爵の息子栗原と恋愛し妊娠したが、恋人に捨てられてしまう。仕方なく中国人留學生丘景山の助けで上海に渡り、墮胎手術を受けた。その間に丘景山に二度も告白されたものの、「あなたは支那人じゃないの」と手酷く断った。その後、自称退役軍人の荒川に騙され、青島にある安藤という退役軍人が経営している妓楼「山海楼」に売り飛ばされてしまう。花子はここで働いている女性たちの悲惨な境遇を目の当たりにし、自身も残酷な目にあつた。

花子は安藤に強姦され、接客をするよう迫られた。それからしばらくして李明年と名乗る商人に出会い、彼の助けで共に上海に逃げた。上海について花子は初めて、李が朝鮮人で上海の仲間と民族解放運動のために秘密運動を行っていることを知った。花子は朝鮮人のことを劣等な民族だと考えていたが、自分にはすでに選択の余地がないと思ひ、李明年と暮らし始めた。しかし李明年は日本人の警察官である池田に疑われていた。ある日李は警察と衝突したあとに彼女を置いて仲間と逃走してしまふ。

早くから池田に狙われていた花子は余儀なく彼と同棲することになった。しかし今度は池田に家庭内暴力を振るわれる。ほどなくして李明年の子を妊娠していることが発覚する。池田が失業すると、花子は手仕事で生計を立てるようになる。娘の麗子が生まれた後、花子は池田の強要で風俗嬢になった。ある日、花子が仕事で留守の間に、日頃麗子を雑種だと罵る池田は、友

人と酒を飲み、三ヶ月の赤ん坊を真冬の露台上に放置して凍死させるといふ残忍極まりないことをしてかしてしまい、逮捕された。花子はダンサーになり、すでに妻子を持っていた丘景山と再会してしばらく不倫関係となったものの、体を壊して丘にも見捨てられ、つい上海の町の私娼になった。

一人の男から次の男へと、花子は浮き草の日々を強いられた。瀋陽―青島―上海、花子の中国での移動は、帝国日本の中国支配・侵略の版図の拡大と重なっている。花子の悲劇の原因は、男を軽々しく信じてしまったということだけではなく、個人の運命が日本の帝国主義や植民地に対する侵略政策に巻き込まれて墜落していくことにもあつた。

郁達夫や郭沫若の作品と異なり、『天孫之女』は主として日本人男性と日本人女性の話である。花子を騙し、搾取した男性はすべて日本人である。李明年と丘景山はまだ人間味のある人物として描かれている。花子の日本人の相手が皆悪玉として造形されているのは、作者張資平が抱く日本人男性に対するステレオタイプやナショナリズムと関わっているだろう。しかし、張は中国人男性の丘景山を花子が頼るべき人物として描くわけではない。丘は花子と肉欲に溺れた日々を過ごしたあと、家族を口実に花子から離れた。日本人であれ、朝鮮人であれ、中国人であれ、男性は花子の救いではなかったのである。もう一つ指摘すべきことは、小説にはほとんど中国人女性が登場しないことだ。瀋陽、青島、上海を放浪する花子が一人も中国人女性



に出会わなかったというのは極めて不自然である。張資平は一人の日本人女性と多くの男性というストーリーを練ったが、国境を越えた女性らの出会いやつながりの可能性を見出すことはなかったであろう。

花子は父が帝国軍人であることを誇りにしていたが、退役軍人から酷い目に遭わされるだけでなく、上海では日本軍人の横暴を極めた様子を目の当たりにし、自身も性暴力の被害に遭うところだった。さんざん苦勞を嘗め尽くした結果、花子はナショナリズムの陥穽と軍国主義の罪悪を認識するようになった。小説の中で、花子は池田に反論しようとして次のような考えを漏らしている。

あなたのご立派な理論は、私は聞いてもあまりわかりません。しかし日本人が白人のイギリス人と一緒になり支那人を虐げるのは妥当ではないと思います。昔満洲に住んでいたとき、私も支那人を圧迫するのは当然のことだと思いました。しかしこの二、三年で様々な苦痛を受けて、少し悟りました。私たち貧しい人々が同じような境遇の支那人に心を開いて協力することこそが、永久の策ではありませんか。<sup>(12)</sup>

花子は日本の侵略政策に批判の目を向けるようになった。しかし軍国主義を否定し階級の問題に目覚めたものの、花子は自

分の進むべき道を見つけることはできなかった。男性にもてあそばれたにもかかわらず、愛欲の海から抜け出せないのである。花子が抱える問題は、張資平がほかの小説で描く、苔莉<sup>(13)</sup>を始めとする近代中国の女性と共通している問題でもある。つまり、自由恋愛を求める過程で肉欲に溺れ、人生の目標を見失うというものだ。ここでは張資平は、花子の恋愛の失敗を国籍の問題というよりも、近代社会が称揚するロマンチック・ラブ・イデオロギーに内包される問題として表現したと言えるだろう。

『天孫之女』は三人称で語られているが、花子に焦点化しており、花子の声を読者に届けやすい語りになっている。また小説には、花子が山海楼で津川文子という女性に出会い、彼女から貧しい家族を養うために身を売った悲惨な経験を聞くシーンが描かれている。帝国日本の植民地政策に巻き込まれた日本の庶民の女性の苦痛が浮き彫りになり、作者のヒューマニズムが読み取れる。近代以降、娼婦として日本からアジアの各地に渡った「からゆきさん」の悲惨な一面を描くことに『天孫之女』の題材の意味があるだろう。また、花子の父親違いの兄がアナキストであることや、母方の祖父が儒学に心酔していることが描かれ、小説の内容をより豊かにしている。

花子のか弱い人物造形からは中国男性作家がそこに日本人女性の「女性」性を求めようとしたことが窺えるとはいえず、

張資平は花子の声を聞くという設定を用いて、花子の内面に立ち入っている。それによって花子は、「沈淪」に見られる顔がわからない女性、あるいは愛傘が描けなかった妻とは異なり、豊かなイメージを持つ女性として描かれている。張資平は東アジアをさまよう日本人女性の悲劇を語り、日本の軍国主義を批判しながら、民族の対立を避けようとした。男女関係の描写において、国籍に関係なく、男性に搾取された女性の声を拾ったのである。

#### 四、女性たちの空間——凌叔華「千代子」

郁達夫、郭沫若、張資平はいずれも男性作家であり、彼らが出た日本の女性は、男性の欲望の対象として想像されたものだ。彼らが描いた「日中恋愛・結婚」は日本人女性と中国人男性というパターンを繰り返している。このような設定は日本の「女性」性を予め規定してしまう。一方、女性作家の視点はどうなっていたらどうか。本節では日本に滞在したことがある作家、凌叔華の短編小説「千代子」を取り上げ、日中交流のうち一つの可能性を探る。

「千代子」は一九三四年の『文学季刊』第一巻第二期に発表された作品である。筆者は別稿で凌が「千代子」を執筆した経緯を検討している<sup>14</sup>。ここでは贅言を避けるが、結論だけいえば、「千代子」は第二次上海事変の後に凌が中国文壇における

抗日文学への要請に応えるべく執筆した小説である。しかしそれは「千代子」がプロパガンダ文学であることを意味しない。むしろ「千代子」は、戦争に巻き込まれ日常を失ってゆく日本人少女の「声」をすくい上げようとする作品と読むべきだ。

ストーリーは一九三二年第二次上海事変以降の京都で展開する。中華料理屋に新しくやってきたおかみさんは纏足てんそくをしているという噂で、大文字町ではお祭り騒ぎになっていた。一二歳の千代子は学校で山田先生から「支那は死んだラクダ同然だ。全く怖がる必要はない。考えてみなさい。男の国民はみんな毎日寝床に横になりアヘンを吸ってばかりいる。女は最も有用な足を纏足にして一歩たりとも歩けない。これでは全国の人々がすべて寝たきりなのと一緒に歩かないか」と教わっている。

子供たちは先生の話を受けて、特に百合子という千代子より二歳上の子は先生の話を一宇一句違えずに覚え、家に帰ると家族や隣人に伝えていると作中では語られている。百合子は先生に「日本少女の模範」だと褒められている。

また千代子は、家で父と父の友人中村の議論を耳にしている。中村は主戦派の政治家の講演に触れ、「去年の戦争が続いている、今ごろ俺らはうまい支那料理を食い、支那娘の纏足をいじっているところじゃないか。ハハハ」と卑猥な妄想させていた。さらに、千代子の母は、家族に日本の女性は中国の女性のように男性の言いなりにはならないと言う。つまり、学校にいても家にいても、千代子は大人から中国差別の話を聞かされ

るのである。このような環境であれば、彼女が町にやってきた「纏足」のおかみさんに差別的なまなざしを投げかけるのもおかしくはない。

ある日千代子は、内山医院の前でおかみさんが子供を抱いているのを偶然見かけた。そして、「彼女の足を見たい」と思い後ろからついていくと、意外と歩くのが速かった。その両足がタタツと馬のひづめみたいに道を飛ぶように歩いていて、面白かった<sup>16</sup>と母に自分の見たことを伝えた。さらに、「千代子の頭に浮かんでいる支那の女性は本当に怪物そのものだ。家になると、生のクラゲのように柔らかい。水に流されるとその場であつたりして動けない。しかし、偶々立ち上がって歩きだすと、タタツと馬のように速く歩ける」というように想像を膨らませていた。

千代子は自分の目でおかみさんの「纏足」を見たくてたまらなかつた。ちょうどそのとき百合子がやってきて、おかみさんが赤ん坊を抱いて山手町の銭湯に向かっていることを千代子に伝え、「纏足って、臭いし汚いし、日本人の銭湯に入る資格があるかしら」、「何か方法を考えてあの支那の女に恥をかかせましょう」と千代子に提案した。

千代子は快諾し、二人は銭湯に向かう。しかし、銭湯の暖簾をくぐるとき、千代子は「急にドキドキし始めた。怖いわけではないが、なんとなく悲しい気がする。高等科で生物を教える先生が蛙の腹を割いて生徒たちに見せたときと同じようにドキ

ドキしていた。おかしいね、なんでだろう？」と感じる。ここでは、語り手は千代子の感情の機微を巧みに捉え、千代子の心の揺れを表現している。

二人の少女は計画どおりに銭湯に入った。千代子は服を脱ぐときに鏡の中の自分を見て、「顔は赤くなり、唇は踊っているようで、不自然な笑い方をしている」ことに気づいた。湯船に入ると、温かいお湯に包まれ「その気持ちいいことはまるでお母さんの懐にいるようだ」<sup>17</sup>つた。そして千代子は浴場の隅で三、四人の女が小さな赤ん坊を囲んでいることに気づいた。彼女たちの笑い声が好奇心がそそれ、千代子も知らず知らずのうちにそこに近づいていた。そこには、次のような光景があった。

なるほどみんながはしゃいでいるのも無理はない。丸々と太った赤ん坊がいろいろないたずらっぽいやつをしてみんなを笑わせている。時々熟した桜桃のような小さな口を開き、トウモロコシの粒のような小さな白い歯を覗かせて人々に天真爛漫な笑顔を見せている。赤ん坊の母親は母親らしい得意げで愛情に満ちた笑みを浮かべている。彼女はタオルの上に跪いており、赤ん坊を水の上で足をパタパタさせて遊ばせている。周りの女たちはみんな赤ん坊を見つめている。みんなの笑い声はなんと自然で、なんと美しいことだろう。千代子は知らず知らずのうちに夢中になり、一分も経たないうちにみんなの笑い声のなかに入って

いった。<sup>19)</sup>

千代子の「不自然な笑い方」と銭湯にいる人々の「自然な笑い声」とが対照的に描かれているが、千代子もすぐに「みんなの笑い声」に溶け込むことができた。ここでは、銭湯という場所が重要である。学校や家では何度も「纏足」の女の話が聞かされてはいるが、銭湯ではみなが裸になっており、そこにはそうした政治的イデオロギーの身体への干渉が解消される可能性が潜んでいる。つまり、「千代子」では、銭湯は人間が国家・差別の衣服を脱いで平等に接し合うことが可能な場として描かれているのである。銭湯では、おかみさんは優しい母として千代子の目に映っており、彼女が「怪物」ではないことを「発見」している。

「千代子」では二人の少女が描かれているが、その描かれ方はやや異なる。作中には、千代子が「みんな」に加わったのを見て百合子が不機嫌になる描写がある。

百合子は千代子が私たちの笑い声に混じっているのを聞きながら、黙って体をお湯に浸していた。彼女は赤ん坊を抱っこしている女は例の纏足の女であることがわかって、いらいらするのと同時に、すこし孤独を感じた。わけがわからない悩みが襲いかかるが、それを表に出すのは恥ずかしかった。彼女は心の中で「千代子ってやはり子供

だ。」と千代子を罵った。しかし、子供であることのために、悪いのという自分への問いには答えられなかった。<sup>20)</sup>

百合子は千代子の「裏切り」に不快になる。おかみさんが銭湯を去った後、百合子は「あなたは全く役に立たないのね。私がいっただけを全部忘れてしまつて」と千代子を責めた。つまりここに、二人の少女に差異がある。年齢に二歳の差があるだけあって、千代子は子供っぽくてすぐに銭湯の和気藹々とした雰囲気溶け込んだが、百合子は自分の「愛国の大事業」を忘れることがない。日々学校で中国人差別や植民主義の教育を受け、先生の話をよく覚える「模範的な生徒」と褒められている百合子は、「軍国少女」になりにかねないのだと語り手が仄めかしているのである。

また、千代子は銭湯では可愛い赤ん坊を見ておかみさんが「纏足」であるかどうかを気にしなかったものの、物語の最後では「ちゃんとおかみさんの足を見なかったことを後悔している」と描かれている。千代子の一貫した考えを持っていない子供心を描写している箇所だが、軍国主義教育の浸透は子供らしい心を失わせかねないという語り手の危惧も込められているだろう。さらに、「千代子」において従来の研究が見落としてきた一つの問題がある。それは、おかみさんは果たして纏足であったのかどうかということだ。小説では、山田先生が纏足の女性は一歩たりとも歩けないと言っている。しかし千代子が見たおか

みさんは、「馬のように」歩くのが速い。そして、物語の終盤には次のような描写がある。

間もなく彼女（百合子）は女が赤ん坊を抱っこして浴場から出るのを見た。赤ん坊が笑うとみんなまた一緒に笑った。女性は慌ただしく白い乾いたタオルで赤ん坊の体を拭いたあと、自分の体を簡単に拭いた。彼女はお風呂に入らなかつた。女性はおつとりとした様子で笑顔の人々に頷いたあと、笑みを浮かべ、ゆつたりとガラスの扉を押し開けて出ていった。<sup>(21)</sup>

ここで初めて正面から女性の表情が描かれており、おつとりとした女性の姿が浮かび上がる。この女性が纏足をしていたのであれば、「馬」のように歩くことは果たして可能だろうか。このような自信溢れる振る舞いができるのか。語り手は答えを明示しない。いずれにせよ、「纏足」の女性に対する差別、町中のお祭り騒ぎは人々の戦争に対する熱狂や中国に対するステレオタイプによるものに過ぎないと語り手は仄めかしているのである。

千代子は軍国主義教育を受けて中国人差別の意識が植え付けられていたものの、銭湯で赤ん坊を抱いている女性を見かけ、子供らしい心を取り戻した。凌は千代子、百合子に焦点化することで、読者に少女たちの内面の声を聞かせることができた。

千代子の子供らしい無邪気さを表現しながらも少女の形象を単純化しなかつたことに、小説の豊かさがある。

凌叔華は、一九二八年に日本に滞在した際、日本人少女に差別的なまなざしを投げかけられ気分を害したことをエッセー「登富士山」（富士山に登る）<sup>(22)</sup>に綴っているが、小説においては個人の好悪を超えて人間の本当の姿を見極めようとした。「千代子」の創作は時代の要請に応じたものだと前に述べたが、凌叔華は中国の女性と日本の少女と同じ空間に置き、古い中国人女性と新しい日本人女性の間緊張した雰囲気醸し出したが、敵意と差別を解消する場として銭湯を設け、野蛮な身体と文明的な身体との二項対立を無効化しようとした。赤ん坊という次世代、未来に向ける温かい愛情は、たとえ一瞬であったとしても、国籍や民族、文明を超えて人々の心をつなげる。凌叔華は日中関係が悪化するなか、女性が身体を通して交流するありさまをその文学に活写したのである。

## 結び

本稿では、郁達夫、郭沫若、張資平の小説を取り上げて、中国近代文学における「日中恋愛・結婚」のナラティブを考察した。日本人少女の愛を欲しながらも彼女たちと会話すらできない少年、自由恋愛を叶えたものの仕事や家庭の負担でヒステリックになった夫／父、さらに日本人女性を弄ぶ女たらしなど、

様々なタイプが登場する「日中恋愛・結婚」の文学には、ナショナリティ、ジェンダー、戦争など、様々な要素が輻輳している。これらの小説では、日本人女性は欲望される対象として語られており、エロティックな視線が向けられていることは否めない。しかし同時に、中国が近代に移行する時期を生きた作家たちの葛藤を垣間見ることまでできる。それは自由恋愛に憧れつつも伝統的倫理を裏切ることへの罪悪感や、自我を模索する過程で味わった失敗、うしろめたさとして描写されている。

一方、「日中結婚」が内包する中国の「男性性」と日本の「女性性」の問題をどう乗り越えるかについて一つの例を示したのが凌叔華である。「千代子」は日本の軍国主義教育に対して批判を行うだけではなく、銭湯という空間を用い、僅かながらも日中の女性が平和と自由を享受しているありさまを想像／創造した。日中の女性を同じ空間に置き、女性同士の敵意、競合、善意と交流を描いた凌叔華のパスpekタイプは、「日中結婚」のオルタナティブとして日中交流の描き方により多くの可能性をもたらしただけである。

〔付記〕 本稿で引用した中国語の日本語訳はすべて筆者が訳出したものである。作品の引用は全集に依拠するが、全集がない場合は初出もしくは初刊に拠った。／は改行を示す。引用文には、現在の社会的・倫理的規範に鑑みて不適切と

考えられる表現もあるが、史料的价值を考慮し、表現を改めることをしなかった。なお、本稿は拙稿「中国現代文学中的日本女性叙事——以二〇世紀二〇—三〇年代的作品为中心」(『現代中国文学与文学』第三五卷、二〇二一年一月)および「想像としての纏足——凌叔華『千代子』を読む」(『論潮』第二二号、二〇一九年七月)を元に大幅に修正・加筆をしたものである。また、本稿は科研費(番号: 23K12114)の助成を受けた成果である。

## 注

(1) 郁達夫『郁達夫全集』第1巻(小説上)、浙江大学出版社、二〇〇八年、四四頁。中国語原文…他避來避去想避他的同學，然而無論到了什麼地方，他的同學的眼光，總好像懷了惡意，射在他的背脊上面。

(2) 四六頁。中国語原文…他忽然想起剛才那兩個女學生的眼波來了。那兩雙活潑潑的眼睛！但轉念一想，她們所送的秋波，不是單送給那三個日本人的麼？唉！唉！她們已經知道了，已經知道我是支那人，否則她們何以不來看我一眼呢！復仇復仇，我總要復她們的仇。

(3) 郁達夫『郁達夫全集』第1巻(小説上)、五八頁。中国語原文…一聽了這一句話，他那清瘦蒼白的面上，又起了一層紅色；含含糊糊的回答了一聲，他訥訥的總說不出清楚的回話來。可憐他又站在

斷頭臺上了。／原來日本人輕視中國人，同我們輕視豬狗一樣。日本人都叫中國人作「支那人」，這「支那人」三字，在日本，比我們罵人的「賤賊」還更難聽，如今在一個如花似玉的少女前頭，他不得不自認說：「我是支那人」了。／「中國呀中國，你怎麼不強大起來！」他全身發起抖來，他的眼淚又快滾下來了。

(4) 中村みどり「盧隱の描いた日本女性像——凌叔華との視点比較から——」『野草』第六九号、二〇〇二年二月、三九頁。

(5) 郁達夫『郁達夫全集』第4卷(遊記 自伝)、浙江大学出版社、二〇〇八年、三〇六頁。

(6) 郭沫若『郭沫若全集 文学卷 第九卷』、人民文学出版社、一九八五年、一八頁。中国語原文：他實在是想冒火，只是遏抑著不發洩出來。他最恨的是他女人的態度——那種沉著的態度！他的女人的性質，他是曉得的Simi Hysteria。(略)他每常苛待他的女人和兒子，只要他們哭了，他便會叫道：O, my dear! My dear! Pardon me! Forgive me! 的。今天只怪他女人不哭，所以他老管不高興。

(7) 郭沫若『郭沫若全集 文学卷 第九卷』二四二頁。中国語原文：醫學有甚麼！能夠殺得死寄生蟲，能夠殺得死微生物，但是能夠把培養這些東西的社會制度滅得掉嗎？

(8) 郭沫若『郭沫若全集 文学卷 第九卷』二九一頁。中国語原文：真是沒辦法呢！要走，我們也不好把你們強留。留也不留住，就和我們留不住蚊子一樣啦！

(9) 郭沫若『郭沫若全集 文学卷 第九卷』二九四頁。中国語原文：

他把姿勢固定了，就跟得了神經病的患者一樣，連一動也不動。

(10) 郭沫若『郭沫若全集 文学卷 第九卷』二九五頁。中国語原文：餓餓！餓餓！就是你們這些小東西要吃甚麼餓餓了！你們使我在上海受死了氣，又來日本受氣！我沒有你們，不是東西歪歪隨處都可以過活的嗎？我便餓死凍死也不會跑到日本來！啊啊！你們這些腳鍊手銬！你們這些腳鍊手銬！你們足足把我鎖死了。

(11) 張資平『天孫之女』、上海文藝書局、一九三二年版、二二頁。中国語原文：日本人，高麗人，支那人，西洋人，還不是一樣的人麼？隨便你們先生說我是那一國人我就是那一國人。

(12) 張資平『天孫之女』、二六八頁。中国語原文：你說了一大篇理論，我雖然不甚懂，不過我覺得日本人和白種的英國人聯合起來凌虐支那人是不妥當的。從前我住滿洲時，也覺得支那人是應當加以壓迫。但是二三年來受了種種的磨折，有些覺悟了，我們貧苦人不是應該和支那的同境遇的人開誠布公地聯合起來才是永久之策。

(13) 荻莉は張資平が一九二七年に出版した長編小説『荻莉』のヒロインである。彼女は夫の浮気に気づき、夫の従弟と不倫關係に陥る。この物語は、結末で二人が心中を図ることになるというように、青年男女の性的苦悶が反映されている小説である。

(14) 林麗婷「想像としての纏足——凌叔華「千代子」を読む」、「論潮」第二二号、二〇一九年七月、一六六—一八一頁。

(15) 凌叔華「千代子」『文学季刊』第一卷第二期、一九三四年四月、一六五頁。中国語原文：支那真是一只死駱駝，一點都不必怕呢。

你想男的國民整天都躺在床上抽鴉片，女的卻把一雙最有用的腳纏得寸步難移。實在說，這還不等於全國人都是癱子嗎？」

(16) 凌叔華「千代子」、一六三頁。中国語原文…「我因為很想細看她的小腳兒，就跟她走了幾步，那知道她倒走得很快，那對小腳兒得，得的在馬路上飛走，像馬蹄子一般，好玩極了。」

(17) 凌叔華「千代子」、一六三頁。中国語原文…在千代子腦子裡，浮現著的支那女子真是怪物。在家裡軟得像一塊生海蜇，被水沖到那裡便癱在那裡不會動了。偶然立起來走路，卻又得得，得的像馬一樣走得很快。

(18) 凌叔華「千代子」、一六六頁。中国語原文…千代子的心裡忽然一陣亂跳，說怕也不是。倒有點像心酸，她那次看到教高等班生物的老师拿著一隻青蛙破肚子給學生看，很像這樣的心跳，這不奇怪嗎？跳什麼呢？

(19) 凌叔華「千代子」、一六六頁。中国語原文…怪不得大家那樣起勁，原來是那個胖娃娃作著各樣的怪臉逗人，他自己時時也咧開那熟櫻桃樣的小嘴，露出幾個洋玉米米粒似地小白牙向著人很天真的笑。她的母親面上卻露出母親特有的又得意又憐愛的笑容。她在瓷磚上跪著，將娃娃放在水面拍拍的踏著玩。圍著他們的幾個女人都是目不轉睛的望著小娃娃，她們笑得多麼自然，多麼柔美，千代子不覺也看迷了。不到一分鐘她也加入她們的笑聲裏了。

(20) 凌叔華「千代子」、一六六—一六七頁。中国語原文…百合子一言不發的在一邊浸著身子，聽著千代子加入那一堆女人的笑聲，她知道那抱娃娃的就是小腳女人，她不免有點生氣，同時卻有點感到自

己的孤寂，一陣無名的煩惱襲上心來，卻又不好意思發揮，心下罵道，千代子到底是小孩子啊！小孩子怎麼不好呢？問到自己，卻又答不出。

(21) 凌叔華「千代子」、一六七頁。中国語原文…不一會兒，她望著那個女人抱著娃娃出了熱水池。娃娃笑，大家又一陣陪笑。女人匆忙的用雪白的幹毛巾擦幹了娃娃才擦了擦自己，她原沒有洗澡。她大大方方的向笑的人點了點頭，微笑著，洋洋地推開玻璃門出去了。

(22) 凌叔華「登富士山」『現代評論』第一九三號、一九二八年八月、一五頁。